

第2章 就業形態と更年期

1 働く女性と更年期

わが国の女性の就業パターンは、未婚期である20歳代前半と子育ての手が離れる40歳代に高まり、子育て期である30歳代前半にボトムに達するM字型をなすことはよく知られている。しかし、近年は、後の山である中高年期の就業率の高まりが顕著である。

総務庁統計局「労働力調査」によると、1970年から1995年の20年間に20～24歳層では70.6%から74.1%へとわずかな伸びであるが、45～49歳層では63.0%から71.3%へ、そして50～54歳層では58.8%から67.1%へと大幅な伸びを示している。さらに雇用者比率についてみると、同じ期間に20～24歳層では59.8%から68.0%へ、45～49歳層では26.5%から54.7%へと倍増している。中高年女性の職場進出は、流通サービス等の第三次産業の発展に伴い安いパート労働者に対する需要が増したことと、出生児数の減少による子育て期間の短縮、教育費や住宅費の高騰、女性の自立意識の高まり等が労働力供給を促進したことによってもたらされたものである。労働力率と雇用者比率の差は、20歳代前半ではわずかだが、40歳代前半では2割弱にのぼる。これは、中高年女性の多くが、農業を中心とする自営業に従事していることを物語る。

働く中高年女性の増加は、更年期に直面する就業女性の増加を示している。近年、働く中高年女性については、子どもの自立の遅れによる養育・教育問題と親の介護という二重の負担に苦しめられていることが注目されるようになったが、健康上の問題にはあまり注意が払われてこなかった。中高年期の健康については、仕事上のストレス、中間管理職としての悩み、リストラによる心身の不安定など、もっぱら男性の問題が取り上げられる傾向にあり、中高年女性が抱える健康問題は無視ないし軽視されてきたといっても過言ではない。この章では、就業形態別に、更年期女性が直面する諸問題を検討したい。

2 対象者の属性

ここでは、一般サンプルと農家サンプルを合算して分析する。その理由は、一般サンプルにも農業に従事する女性がいることと、農家サンプルにも雇用者が含まれるからである。集計には、無回答者が除いてあるので、合計数は一致しない。

表2-1に示されるように、就業経験のある者は、一般サンプル998、農家サンプル167で、約9割を占める。現在就業中は、一般サンプル538、農家サンプル60で、約6割である(表2-2)。そのうち継続して働いてきた者は63.9%、仕事収入が生活の支えになっている者は64.9%である。

表2-3によって、年齢別就業形態をみると、年齢が上昇するほど雇用者比率が減少するが、とりわけ正社員の比率の減少が著しい。正社員は40歳代では約半数を占めるが、50歳代では4割強、そして60歳代では13.1%にすぎない。しかし、パート労働者については、年齢との関連は明白ではなく、50歳代よりもむしろ60歳代のほうが多くなっている。それに対して、農業従事者は、年齢が上がるにつれて増加する傾向にあり、40歳代では6.2%だが、50歳代では17.3%、60歳代では34.8%と、10歳ごとにほぼ倍増している。このことから、わが国の農業が高齢女性によって支えられていることが明らかである。

表 2-1 職業経験の有無

	あり	なし	合計
一般サンプル	998	77	1075
農家サンプル	167	57	224
合計	1165	134	1299
%	89.7	10.3	100.0

表 2-2 就業状況

	現在就業中	過去に就業	合計
一般サンプル	538	324	862
農家サンプル	60	79	139
合計	598	403	1001
%	59.7	40.3	100.0

表 2-3 就業形態(%。カッコ内は実数)

	雇用で正社員	雇用でパート	農業	自営業 (農業を除)	自由業	その他、不明	合計
40歳代	48.2	21.8	6.2	7.4	3.9	12.5	100.0(257)
50歳代	40.7	14.8	17.3	6.5	4.5	16.2	100.0(445)
60歳代	13.1	17.2	34.8	8.1	7.6	19.2	100.0(198)
%	36.8	17.3	18.0	7.1	5.0	15.8	100.0(900)

3 更年期の症状

中高年女性が訴えるさまざまな症状に対して、一般には「それは更年期障害だよ」と簡単に片付けられることが多い。対象となった女性たちは、どのような身体的精神的症状を訴えているのだろうか。

表2-4は、更年期に直面する身体的症状を就業形態別にみたものである。まず農業女性についてみると、全体の平均を上回るのは、「肩凝り」「トイレが近くなった」「腰痛」「関節痛」の4項目、平均とほぼ同じであるのは「しびれ」「性欲減退」の2項目であり、それ以外はいずれも平均を下回る。平均よりも大幅に下回るのは「のぼせ、ほてり、発汗」で、平均の36.3%に対して24.3%と10ポイント以上も低い。平均よりも5%以上低いのは「冷え」「動悸」「耳鳴り」「月経期間の延長」「便秘」などである。「何もなかった」がもっとも多いのが農業女性であり、平均は11.8%だが、農業女性では14.2%である。雇用正社員に比較的多いのは、「むくみ」「尿もれ」「性交痛」だが、平均との差はわずかである。平均とほぼ同じであるのは、「のぼせ、ほてり、発汗」「動悸」「皮膚のかゆみ」「月経の量が多くなった」「月経期間の延長」「円形脱毛症」「性交痛」「何もなかった」の8項目で、他はいずれも平均を下回る。

パート女性では平均を上回る項目が多数を占める。平均より低いのは、「めまい」「月経期間の延長」のわずか2項目、平均にほぼ等しいのは「しびれ」「腰痛」「便秘」の3項目で、他はいずれも平均を上回る。平均を5%以上上回るのは、「動悸」「肩凝り」である。「何もなかった」が12.8%で平均をやや上回るにもかかわらず、ほとんどの項目で平均を上回るのは、一人で何項目もあげる人が多いからである。

農業を除く自営業および自由業女性で、平均を下回るのは「のぼせ、ほてり、発汗」「めまい」「しびれ」「頭痛」「性交痛」の4項目、ほぼ平均であるのは「むくみ」「関節痛」「性欲減退」の3項目で、他はいずれも平均を上回るが、その差は5%を超えない。

無職女性で、平均を上回るのは「のぼせ、ほてり、発汗」「冷え」「めまい」「耳鳴り」「月経期間の延長」「頭痛」「便秘」「性交痛」「性欲減退」の9項目、そのうち「のぼせ、ほてり、発汗」が40.3%でどのグループよりも高くなっている。平均にほぼ等しいのは、「動悸」「息切れ」「しびれ」「皮膚のかゆみ」「月経の量が多くなった」「腹痛」「関節痛」の7項目で、他は平均を上回る。「何もなかった」の比率がもっとも低いのは無職女性である。

「その他」も含めて、身体的症状の訴えが平均を上回っている項目数は、農業3、正社員4、パート19、農業以外の自営業・自由業17、無職9である。労働条件がきびしいと思われる農業や正社員よりも、パートや自営業・自由業に身体的症状の訴えが多いということは、定期的な就労が身体的な症状を忘れさせる、あるいはパートや自営業・自由業の労働が不規則なうえに過酷であることをうかがわせる。

つぎに精神的症状についてみることにする。表2-5に示されるように、農業女性において平均を上回るのは「不眠」「眠りが浅い」の2項目にすぎない。平均を5%以上下回るのは「うつ状態」「不安感」「自信喪失」の3項目である。正社員で平均を上回るのは、「うつ状態」「対人関係が苦痛」「自信喪失」の3項目だが、その差はわずかである。パートでは、平均を下回る項目はゼロである。平均を上回るのは、「イライラ」「うつ状態」「無力感」「不安感」「対人関係が苦痛」の5目だが、いずれもどのグループよりも高率

表2-4 就業形態別更年期の身体的症状(%)

	就業形態					合計
	農業	雇用正社員	パート	その他・自 営・自由業	無職	
のぼせ、ほてり、発汗	24.3	36.9	37.2	34.3	40.3	36.3
むくみ	6.5	10.2	11.1	8.8	7.8	8.8
冷え	11.8	13.5	17.2	18.7	17.5	16.1
めまい	13.0	17.3	15.6	15.5	18.8	16.8
動悸	8.3	15.9	20.6	17.0	15.4	15.6
耳鳴り	7.1	10.5	15.6	13.4	14.4	12.7
息切れ	5.9	7.5	11.7	9.5	8.8	8.7
肩凝り	31.4	25.3	33.3	23.3	26.9	27.1
しびれ	12.4	10.2	12.2	15.9	12.7	12.6
皮膚のかゆみ	10.1	14.1	18.3	15.2	14.4	14.5
トイレが近くなった	17.2	10.8	15.6	15.2	11.9	13.2
尿もれ	4.7	11.3	10.6	9.9	7.4	8.9
月経の量が多くなった	11.8	15.6	16.1	16.6	15.7	15.5
月経期間の延長	5.9	12.4	11.7	13.8	12.6	12.0
腰痛	29.0	14.8	19.4	20.8	18.8	19.4
頭痛	16.0	16.3	20.0	15.9	18.4	17.4
腹痛	2.4	4.9	6.1	8.5	5.1	5.5
関節痛	13.6	9.5	15.0	12.0	12.3	12.0
便秘	4.7	8.6	9.5	11.3	11.2	9.7
円形脱毛症など	0.6	3.0	7.2	4.2	2.9	3.4
子宮筋腫関連の悩み増幅	3.6	6.5	9.4	9.2	6.7	7.1
性交痛	8.3	11.9	11.7	9.2	11.2	10.8
その他	4.1	6.5	7.2	6.7	4.9	5.8
性欲減退	15.5	11.6	18.3	15.5	17.4	15.6
何もなかった	14.2	11.1	12.8	13.8	10.1	11.8

表2-5 就業形態別更年期の精神的症状

	就業形態					合計
	農業	雇用正社員	パート	その他・自 営・自由業	無職	
イライラ	25.4	25.1	30.6	27.3	25.5	26.3
うつ状態	6.5	13.8	18.3	13.8	12.1	12.9
不眠	16.6	11.4	14.5	13.4	16.2	14.4
眠りが浅い	22.2	17.9	20.0	19.4	21.1	20.0
無力感	7.1	11.4	19.4	13.4	16.3	14.0
不安感	10.1	13.8	20.6	17.7	16.6	15.9
対人関係が苦痛	5.3	11.3	10.0	8.5	9.9	9.5
自身喪失	5.3	11.9	10.6	9.2	12.7	10.8
その他	2.4	4.9	5.6	9.2	4.2	5.2
何もなかった	26.8	26.7	25.0	27.9	27.4	27.0

である。パートでは身体的症状の訴えももっとも多いが、精神的な症状の訴えももっとも多くなっているのである。農業以外の自営業・自由業で、平均を上回るのは「イライラ」「うつ状態」「不安感」「その他」の4項目だが、その差はわずかである。無職女性で平均を上回るのは「不眠」「眠りが浅い」「無力感」「不安感」「自信喪失」の5項目である。身体的症状と同様、農業や正社員よりもパートや無職に訴えが多くなっている。とりわけパートにおける「無力感」「不安感」の高さが目だっており、自分の仕事に対する統制力の欠如がそうした感情を呼び起こしているものと思われる。

4 更年期の頃に直面した問題

一般に更年期は、女性のライフサイクルにおける重要な転換期に訪れる。フルタイムで働いてきた場合には、責任あるポストに就き仕事が忙しくなる。家庭では子どもが自立をする時期である。だが、仕事に追われる夫には、妻と話し合う時間が十分になかったり、過労や仕事のストレスから病気になる夫も少なくない。また、夫や自分の親の介護問題が発生するのもこの頃である。

表2-6は、就業形態別に更年期の頃に直面した（直面する）問題をみたものである。農業女性の場合、夫もまた農業に従事するケースが多いので、「夫の転勤」「単身赴任」「定年やリストラ」をあげる者はほとんどいない。とくに比率が高いのは、「子どもの恋愛・結婚」「嫁・姑の不和」「夫の病気」「夫の親の介護」である。農家の嫁不足が深刻であることはよく知られている。また、同居世帯の多い農家では、「嫁・姑の不和」や「夫の親の介護」は避けがたい。

正社員に比較的多くみられるのは、「子どもの受験」「仕事の多忙さによるストレス」「職場の人間関係」である。とりわけ「仕事のストレス」と「職場の人間関係」は平均を大幅に上回っており、責任のある地位に就き、仕事の忙しさが増す時期がちょうど更年期にぶつかることを示している。パートに比較的多いのは、「子どもの受験」「夫の親の介護」「自分の親の介護」「住宅の購入や増改築」である。既婚女性が働く理由の上位にあげられるのは、教育費と住宅費であることを考えると、この結果は納得できる。ここでは現在の就業形態との関連をみているが、パート女性のなかには、夫や自分の親を介護するためにフルタイムからパートタイムに替わった者も少なくないだろう。

農業以外の自営業・自由業には雑多なものが含まれるので、はっきりした傾向をとらえることは難しいが、「住宅の購入や増改築」が他に比べて多くなっている。無職女性に比較的多いのは、「子どもの恋愛・結婚」「子どもの独立」「夫は仕事一筋」である。子どもを生き甲斐にしてきた専業主婦は子どもが家を離れることに寂しさを感じているが、夫は仕事一筋で家庭を顧みないために、いわゆる「空の巣症候群」に陥っている様子が推察される。反対に、他に比べて少ないのは、「夫の親の介護」「自分の親の介護」であり、彼女たちが現在無職であるのは、必ずしも介護のせいではないようだ。

5 更年期障害の解消策

表2-7は、「更年期を乗り切るうえで良かったと思われること」を就業形態別にみたものである。農業女性に目立つのは、「特に努力はしなかった」が、どのグループよりも多く、約3分の1弱を占める。もっとも多くあげられていたのは、「おしゃべりなどスト

表2-6 就業形態別問題(%)

	就業形態					合計
	農業	雇用正社員	パート	その他・自営・自由業	無職	
こどもの受験	15.4	24.9	24.4	17.0	18.3	20.0
こどもの恋愛、結婚	31.4	10.6	10.6	12.4	20.9	16.8
こどもが独立	8.3	8.7	9.4	13.1	15.5	12.0
こどもが独立いつまでも自立(結婚)しない	6.5	6.0	8.9	6.0	7.4	6.9
嫁・姑との不和	11.2	2.4	5.0	4.2	4.3	4.7
夫は仕事一筋	13.0	7.0	13.9	14.8	17.7	13.7
夫の転勤	0.6	1.9	3.9	2.8	6.5	3.8
夫の単身赴任	0.6	4.1	6.7	2.8	6.3	4.6
夫の定年やリストラ	2.4	2.2	4.5	3.2	5.4	3.8
夫の病気	11.2	3.0	8.3	5.0	6.3	6.0
夫との離別・死別	1.8	2.2	3.4	4.9	2.0	2.7
夫の親の介護	20.1	11.7	18.3	14.5	11.0	13.6
自分の親の介護	7.7	13.3	14.4	13.8	11.9	12.4
自分の定年やリストラ	0.0	1.1	3.4	1.1	2.3	1.7
仕事の多忙さによるストレス	18.9	28.3	6.7	23.0	10.3	17.4
職場の人間関係	0.6	20.5	10.6	8.5	4.7	9.4
自分の異性問題	0.6	1.1	1.1	1.1	1.1	1.0
夫の異性問題	1.8	1.1	2.8	0.7	1.8	1.5
親族関係のトラブル	5.9	3.2	7.2	7.4	4.3	5.1
老後の生活設計がしにくい	7.7	4.6	8.9	6.7	7.7	6.9
住宅の購入や増改築	7.7	7.8	12.8	13.4	11.4	10.7
その他	3.0	5.9	5.0	6.0	3.8	4.8

表2-7 就業形態別更年期障害解消策(%)

	就業形態					合計
	農業	雇用正社員	パート	その他・自営・自由業	無職	
やりがいのある職業または社会活動で、忙しく毎日を充実させる	29.8	40.7	40.8	47.3	28.1	36.2
打ち込める趣味がある	28.6	19.1	29.1	29.5	32.9	28.1
おしゃべりなどストレス発散を助け合う友人がいること	40.5	31.9	45.3	37.4	42.5	39.2
旅行、外出、買い物などストレスを発散する経済力がある	25.0	30.6	29.1	31.0	24.4	27.7
あれこれ欲張らずに休暇・休息をとること	15.5	16.1	24.0	17.4	17.5	17.7
酒やたばこなど嗜好品をたしなむこと	1.2	5.5	1.1	3.2	1.8	2.8
夫が共感、同情を示してくれること	8.9	6.8	8.9	8.2	10.6	8.9
夫があまり家にいないので自分の時間が持てること	4.8	4.1	10.1	6.8	10.0	7.5
大学へ再入学したり、各種講座で学習するなど新しい目標をつくること	3.6	4.9	12.8	6.0	8.9	7.3
子どもがやさしく共感同情を示してくれること	8.9	6.3	7.3	6.8	6.4	6.8
老親(夫と自分の)が健康で、介護負担が重ならないこと	11.3	12.0	8.9	8.9	11.8	10.9
医療機関が良いこと(主治医が適切な治療や精神的なサポートをしてくれる)	6.0	2.7	5.6	5.0	7.1	5.4
ホルモン療法が適して効果があること	1.2	2.5	2.2	1.4	1.8	1.9
中高年女性の自信を強めるような相談機関、カウンセラーがいること	0.6	3.0	3.4	3.2	4.4	3.2
「もう女でなくなった」などと自分も周囲も思わないこと	17.3	17.8	15.6	18.1	20.4	18.5
その他	0.0	0.8	0.6	1.1	0.2	0.5
特別に努力はしなかった(していない)	32.1	21.9	15.6	22.8	22.7	22.7

レス発散を助け合う友人」(40.5%)であり、「やりがいのある職業または社会活動」(29.8%)「打ち込める趣味」(28.6%)「旅行、外出、買物などストレスを発散する経済力」(25.0%)「もう女でなくなったと思わない」(17.3%)「欲張らず休暇・休息をとる」(15.5%)「老親が健康で介護負担が重ならないこと」(11.3%)の順になっている。このうち平均を上回るのは、「友人」と「介護負担がないこと」で、他はいずれも平均を下回る。なお「子どもの共感同情」をあげる者がもっとも多いのは、農業女性である。

正社員では、「何も努力せず」は21.9%。多い順に「やりがいのある職業や社会活動」(40.7%)「友人」(31.9%)「経済力」(30.6%)「趣味」(19.1%)「女でなくなったと思わない」(17.8%)「休暇・休息」(16.1%)「介護負担がないこと」(12.0%)の順になっている。このうち平均を上回るのは「職業や社会活動」「経済力」「介護負担がないこと」の3項目である。すなわち、働いて自由になるお金があることが、ストレス発散を可能にしているのである。

パート女性では、「友人」(45.3%)「職業や社会活動」(40.8%)「趣味」(29.2%)「経済力」(29.1%)「休暇・休息」(24.0%)「女でなくなったと思わないこと」(15.6%)「大学への再入学や各種講座」(12.8%)「夫が不在がちなため自分の時間をもてる」(10.1%)の順になっている。このうち平均を下回るのは、「女でなくなったと思わない」のみで、他はいずれも平均を上回る。平均との差が5%を超えるのは、「友人」「休暇・休息」「大学への再入学や講座」であり、仕事以外に生き甲斐を求めるパート女性の姿を示している。なお、「何も努力せず」が15.6%でもっとも低いのがパート女性である。

農業以外の自営業・自由業では、「職業や社会活動」(47.3%)「友人」(37.4%)「経済力」(31.0%)「趣味」(29.5%)「女でなくなったと思わない」(18.1%)「休暇・休息」(17.4%)の順になっている。このうち平均を上回るのは「職業や社会活動」「趣味」「経済力」である。とりわけ「職業や社会活動」をあげる者が多く、その比率はどのグループよりも高くなっている。なお「何も努力せず」は22.8%ではほぼ平均値に近い。

無職女性では、「友人」(42.5%)「趣味」(32.9%)「職業や社会活動」(28.1%)「経済力」(24.4%)「女でなくなったと思わない」(20.4%)「介護負担がないこと」(11.8%)「夫の共感同情」(10.6%)「夫が不在がち」(10.0%)の順になっている。このうち平均を下回るのは「職業や社会活動」「経済力」であり、他はいずれも平均を上回る。すなわち、専業主婦の場合には自由になるお金が少ない代わりに、自由になる時間は十分にあることを物語る。他に比べて無職女性にその比率が高いのは、「趣味」「夫の共感同情」「女でなくなったと思わない」である。また、値は小さいが、他に比べて無職女性に相対的に比率が高いのは、「医療機関が良い」(7.1%)と「相談機関、カウンセラーがいる」(4.4%)であり、自由になる時間の多い無職女性が地域社会の資源を有効に利用している様子がうかがわれる。なお「何も努力せず」は、22.7%で、ちょうど平均値と同じである。

6 更年期対策

更年期を乗り切るためには、個人的な努力のみでは不十分であり、外部からの働きかけや社会的な対策が望まれる。更年期を健やかに過ごすためには、今後どのような対策が必

表2-8 就業形態別更年期対策(%)

	就業形態					合計
	農業	雇用正社員	パート	その他・自営・自由業	無職	
更年期をプラスイメージでとらえる社会的意識づくり	20.8	45.6	39.3	38.4	37.2	37.9
女性自身が更年期について正確な知識を持ち、冷静に対応すること	53.0	53.6	53.4	57.3	60.7	56.7
更年期の女性側の状況や意識について医療関係者がよく認識すること	13.7	21.4	19.6	19.9	20.4	19.7
更年期について適切でアクセスしやすい相談機関の充実	14.9	31.8	21.2	26.4	24.4	25.1
更年期についてもっと豊富な情報提供が行われること(電話サービス、保健所、女性センターなどの個人相談)	22.6	35.1	26.8	28.8	28.2	29.2
更年期についてのタテワリではない総合的機関の設置	3.0	11.7	12.8	10.7	8.0	9.4
更年期について適切な治療を行ったり、精神的なケアなどの対応ができる人材の育成	25.6	29.8	27.9	31.3	26.5	28.2
更年期について夫や男性が適切な対応をするように、社内研修や社会教育の実施	7.7	19.1	20.7	16.7	16.4	16.7
職場で若年男女に更年期女性への理解をすすめる	7.1	16.1	16.2	13.2	10.0	12.4
更年期休暇などを設け、休みを取りやすくする	8.9	19.4	14.5	17.1	16.2	16.1
深夜勤には配慮するなど更年期の労働条件をよくしてほしい	5.4	17.0	18.5	14.9	12.2	13.8

要だろうか。表2-8は、今後必要と思われる対策を就業形態別にみたものである。もっとも多くの女性があげていたのは、「女性自身が更年期について正確な知識をも値、冷静に対処すること」が6割弱を占め、女性自身のエンパワーメントへの関心がどのグループでももっとも高い比率を占めている。ついで「更年期をプラスイメージでとらえる社会的意識づくり」(37.9%)「更年期についての情報提供」(29.2%)「更年期について適切な治療のできる人材育成」(28.2%)「アクセスしやすい相談機関の充実」(25.1%)「更年期女性について医療関係者がよく認識すること」(19.7%)「男性が適切に対応するよう社内研修・社会教育を実施」(16.7%)「更年期休暇」(16.1%)「労働条件の改善」(13.8%)「職場での理解」(12.4%)「総合的機関の設置」(9.4%)の順になっている。

農業女性に比較的多くみられるのは、「女性自身の知識」(53.0%)「人材の育成」(25.6%)「情報提供」(22.6%)「社会意識づくり」(20.8%)「相談機関の充実」(14.9%)「医療関係者の認識」(13.7%)である。しかし、どの項目も平均値を下回っており、農業女性では更年期に対する関心があまり高くないように見受けられる。

それに対して正社員では「女性自身の知識」を除いては、どの項目も平均値を上回る。なかでも平均との差が5%以上ある項目は、「社会的意識づくり」「相談機関の充実」「情報提供」の3項目であり、更年期に対する関心の高さ、とりわけ社会的サービスの拡充への期待が大きいことを示している。

パート女性では、「女性自身の知識」(54.4%)「社会的意識づくり」(39.3%)「人材の育成」(27.9%)「情報の提供」(26.8%)「相談機関の充実」(21.2%)「男性のための教育」(20.7%)「労働条件の改善」(18.5%)「職場の理解」(16.2%)「更年期休暇」(14.5%)「総合的機関の設置」(12.8%)の順になっている。このうち平均を上回るのは、「社会的意識づくり」「総合的機関の設置」「男性の教育」「職場の理解」「労働条件の改善」の5項目だが、平均との差が5%を超える項目は一つもない。農業以外の自営業・自由業では、「情報の提供」「男性の教育」を除いては、いずれも平均を上回るが、その差はわずかである。無職女性では、「女性自身の知識」と「医療関係者の認識」を除いては、いずれも平均を下回るか平均とほぼ同様の値を示している。雇用されて働く女性が、「社会的意識づくり」「情報提供」「相談機関の充実」「労働条件の改善」など外的条件の整備拡充をあげているのに対して、無職女性では「更年期について正確な知識をもつ」といった自らのエンパワーメントをあげる者がどのグループよりも高率であることは興味深い。

7 就業形態別の特徴

雑多な職業が含まれる農業以外の自営業・自由業を除いて、各グループの特徴を以下にまとめることにする。

1) 農業女性

比較的年齢が高く、身体的症状、精神的症状ともに訴える者の比率が低い。これは年齢が高いため過去の経験を忘れてしまったか、実際に農業従事者は更年期障害の程度が軽いかのいずれかであろう。更年期の頃に直面した問題には、「子どもの結婚」「嫁・姑の不和」「夫の親の介護」などがあげられ、嫁不足や舅姑との同居という農家特有の問題が浮

き彫りになっている。更年期解消策としては、「何もしなかった」がどのグループよりも多い。個人的な解消策および更年期対策のいずれについても、言及する者の比率がどのグループよりも低く、更年期に対する関心の低さ、あるいは日常生活の多忙にまぎれて更年期のことを考える暇がないことを推測させる。

2) 正社員女性

比較的年齢が若く、したがって現に更年期の最中である者が少なくないと思われるが、農業女性と同様、身体的症状、精神的症状ともに訴える者の比率が低い。「仕事のストレス」や「職場の人間関係」などに悩まされながらも、正社員に訴えが少ないのは、仕事の忙しさや働き甲斐が更年期障害を忘れさせるのではなからうか。やりがいのある職業に従事し、自分の自由になるお金があることが、正社員女性の更年期解消に役だっていることは確かである。更年期対策への関心は非常に高く、とりわけ社会的サービス拡充への関心の高いことが注目される。

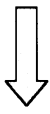
3) パート女性

年齢的な特徴はなく、どの年齢層にもほぼ同程度存在する。身体的症状、精神的症状ともに、その訴えがもっとも多い。とりわけ「無力感」や「不安感」をあげる者が多いのは自分の仕事に対する統制力を欠くことから生じているように思われる。更年期解消のために「何もしなかった」者がもっとも少ないのがパート女性であり、更年期障害に苦しみ、さまざまな解消策を試みていることが推測される。更年期対策としては、女性自身が知識をもつことや社会的意識づくりの他に、「男性の教育」「職場の理解」「労働条件の改善」など労働の場面における改善を求める者が目立つ。

4) 無職女性

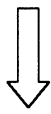
パート女性と同様、身体的症状、精神的症状ともに訴えが多く、とりわけ典型的な更年期の症状である「のぼせ、ほてり、発汗」がどのグループよりも高率であることが注目される。無職女性では、更年期と子どもの自立の時期が重なり、しかも「夫は仕事一筋」のため、いわゆる「空の巣期症候群」に陥っている。やりがいのある職業がなく、生き甲斐であった子どもの自立に直面する無職女性にとって、更年期障害が重くのしかかるということも考えられるだろう。

職業に従事しない彼女たちは自分の自由になるお金が少ない代わりに、自由になる時間は多く、趣味や友人によってストレスを発散し、更年期を乗り切っている。彼女たちは、働く女性に比べて地域社会との絆が強く、「医療機関」「相談機関」など地域社会の資源を有効に利用しているように見受けられる。社会的なサービスの拡充よりも、女性自身が更年期について正確な知識をもつことにもっとも熱心なのが無職女性である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1 働く女性と更年期

わが国の女性の就業パターンは、未婚期である 20 歳代前半と子育ての手が離れる 40 歳代に高まり、子育て期である 30 歳代前半にボトムに達する M 字型をなすことはよく知られている。しかし、近年は、後の山である中高年期の就業率の高まりが顕著である。

総務庁統計局「労働力調査」によると、1970 年から 1995 年の 20 年間に 20～24 歳層では 70.6%から 74.1%へとわずかな伸びであるが、45～49 歳層では 63.0%から 71.3%へ、そして 50～54 歳層では 58.8%から 67.1%へと大幅な伸びを示している。さらに雇用者比率についてみると、同じ期間に 20～24 歳層では 59.8%から 68.0%へ、45～49 歳層では 26.5%から 54.7%へと倍増している。中高年女性の職場進出は、流通サービス等の第三次産業の発展に伴い安いパート労働者に対する需要が増したことと、出生児数の減少による子育て期間の短縮、教育費や住宅費の高騰、女性の自立意識の高まり等が労働力供給を促進したことによってもたらされたものである。労働力率と雇用者比率の差は、20 歳代前半ではわずかだが、40 歳代前半では 2 割弱にのぼる。これは、中高年女性の多くが、農業を中心とする自営業に従事していることを物語る。

働く中高年女性の増加は、更年期に直面する就業女性の増加を示している。近年、働く中高年女性については、子どもの自立の遅れによる養育・教育問題と親の介護という二重の負担に苦しめられていることが注目されるようになったが、健康上の問題にはあまり注意が払われてこなかった。中高年期の健康については、仕事上のストレス、中間管理職としての悩み、リストラによる心身の不安定など、もっぱら男性の問題が取り上げられる傾向にあり、中高年女性が抱える健康問題は無視ないし軽視されてきたといっても過言ではない。この章では、就業形態別に、更年期女性が直面する諸問題を検討したい。